大淀川と岩瀬川が合流する自然豊かなところ
「笛水の元気」発信中！

全国では、国から市町村に、市町村から地域にという「地方分権」「地域主権」が進んでいます。

それは、地域のことは、そこに住む住民が考え、それぞれの事情にあったまちづくりが進められるという考え方によるものです。

本市でも、地域協議会の設置や、まちづくり協議会の設立が検討されるなど、地域が主体となったまちづくりが進んでいます。

こうした行政の取り組みのほかに市内各地で、さまざまな民主団体が自分たちの住む地域を見つめ直し、地域にある素材を生かした独自の取り組みを行っています。

今回は、平成21年に県の「いきいき集落」に認定された高崎町笛水地区公民館長の春村光行さんと笛水地域活性化委員会会長の竹山國比古さんに今までの取り組みとこれからの展望、地域づくりに必要なものとは何かを聞きました。

この機会に「地域のちから」とは何か、今後の地域のあり方について、考えてみませんか。

地域にある宝を見つめ直す

地域が一つとなり
いきいきとした集落が
ここにある

緑豊かな笛水地区

野尻町と隣接し、野尻湖のほとりに広がる緑豊かな高崎町笛水地区。地区内には、椎屋・後平・竹元・崎山の4つの自治公民館があり、世帯数150戸、450人が暮らしています。山間部という立地のため高齢化率も31パーセントと市全体の25・6パーセントと比較すると高い水準にあり、今後、人口減少の波にさらされようとしている地域です。

まずは、足元を見つめ直すことから

館長　この地域でもほかの地域と同様に少子高齢化が進んだり、人との交わりや、連帯感が薄れたりして、将来に危機感を感じ始めていました。そんなときに県の地域振興課のまちの活性化事業の話を聞き、地域おこしのチャンスだなっと思って新しい集落づくりモデル事業に平成14年度から取り組んだのが活動の始まりです。笛水おこしのため、地区住民にアンケート調査などを行い、地域を見つめ直すことから始めました。

会長　過疎地域はどうすれば生き残っていけるか。平成15年までの2年間、予算などあるわけではないので、机上で勉強しましたね。

館長　最初、地区の役員や女性部員など総勢28人が参加し、今の活性化委員会の前身である笛水地区地域活性化検討委員会で「笛水のいいところはなにか」を問いかけることから始まりました。

会長　その中で、地域を見つめ直し、使える宝は何か、どのような取り組みを進めていけるか検討したところです。

茅葺（かやぶき）の里づくりから始まるまちづくり

館長　話し合いを進めてきた構成メンバーは事業終了後は、解散する予定でした。しかし、メンバーの中から「県の事業が終わったから地域も終わるのでは、現状は何も変わらない」という意見が多く出されたんですよ。その声を受け、笛水地区公民館の一つの組織としてそのときのメンバーと新しい地区の役員が自主的に「笛水地区活性化委員会」を正式に立ち上げました。「笛水をどげんかせっせ活性化すっど！」を合言葉に、できることからやっていこうと活動を始めました。

笛水地区公民館
- 椎屋自治公民館
- 後平自治公民館
- 竹元自治公民館
- 崎山自治公民館

笛水地区活性化委員会
地区内全体の整備要望や地区内独身男女のための縁結び事業など

生活環境部会
笛水ウオーク、沿道の整備、笛水の元気花壇の植栽の開催など

竹山　國比古　会長

会長　そうしたとき、産業振興部会から地元でとれた農産物を売る販売所を作ろうと声が挙がったんです。作る上では、笛水にしかない直売所をということで検討を重ねてかやぶきに決定しました。笛水といえば「かやぶきのあるところだな」となってくれればいいと考えてですね。確かに、他のいろいろな地域でも地場産品の販売所がありますが、行政に作ってもらったり、運営の補助を受けたりしている。それはある意味で簡単だけど、笛水の場合はみんなの手作りだから、思い入れや愛着があり、ずっと守っていきたいという住民の思いが強いんですよ。

それが笛水なんですよ

館長　いざ、「茅葺の里」を作ろうとなったとき、お金がなく対策に困りましたが、地区で話し合いをすると地区全体が協力してくれるわけですよ。みんなでカヤを探すことから始めて、建物の骨組みを作るなどみんなから労力を出してもらいました。

会長　資材やお金を地区内外の人たちから寄付していただき、自分たちはボランティアで作業をしました。しかし、いざ運営するとなると、光熱費や人件費などのお金がかかり、とてもまだ黒字には持っていけません。笛水のシンボルを守るために芋を植えるなど、資金集めもして自分たちの力で運営している状況です。

館長　こうしたいろいろな活動も、委員会で準備するのはにぎり飯と豚汁のようなものだけ。それでも地域の人が理解し、協力してくれます。お金はくれないのか、飲ん方はないのか、そんなことは誰も言わない。それが笛水なんですよ。

広がる地域の理解

会長　最初は少ない人数で始めたので、いつも来るのは同じメンバーでしたね。けれども自分たちがこうやって動いていたら、地域の人もほおっておけなくなるんじゃないかとそう思って活動を続けていました。参加も自由、脱退も自由が活性化委員会の決まりですし。

館長　そういう活動が評価されたのか分かりませんが、最近徐々に広がりをみせてきているんです。発足当時は、31人だった組織も今では49人にまで増えました。

会長　学校の先生や保護者たちも活性化委員会のメンバーとして活動していたり、ほかから引っ越して来た人も自然と仲間に入ったり、それが笛水のよさですかね。

館長　ほかにも、PTAを終わった保護者もPTAの協力会を組織していて、学校の門松をつくったり、奉仕活動への協力をしたりなど加勢してくれていますよ。

春村　光行　館長

教育・文化振興部会
小・中学生や高校生の宿泊体験活動、米作り体験、野焼き陶芸の実施

産業振興部会
農産物直売所「茅葺の里」の管理運営、イベントの開催、販売・加工者の育成など

笛水ウオークで田舎を満喫

地域の宝 子どもへの思い

会長　地域のこれからを考える上で話題となったのが、子どもたちのこと。地域で子どもを育てなければいけないと口では言うけど、何をしたらいいのか分からないんですよね。子どもが参加できる田植えや夏祭り、稲刈り、餅つきなどを高齢者と一緒に体験すること、子どもたち同士や地域の人と接する場を提供すること、それが子どもの育成につながればといろいろな交流事業をしているわけです。実際に子どもたちが喜んでいるのか分りませんけれども。

館長　また、子どもたちの通う小・中学校をどうするかということですね。地元の子どもだから、大事にしたいという思いは、どの地域でも一緒じゃないですか。今後、いじめや登校拒否がない自慢の学校をどうやって残し、どう活用するかも課題でしたね。

そこで、地域で考えたのが小中一貫校という方法。そのときは小中一貫校とは、どういったものか、全然、分かりませんでしたから、実際小中一貫校を行っている広島県尾道市百島まで、視察にも行きました。「地区の方々が視察に来られるのは珍しい」と相手も戸惑っていましたが、丁寧に説明してもらいました。

笛水の小・中学校は、いじめで悩む子どもも校区外からも入学可能な学校区特認が承認されています。また、平成22年度から笛水の小・中学校は、小中一貫校となります。これも地域でどうあるべきかを合併前から話し合い、学力向上と笛水地域独自の教育色を打ち出すために地元から声を上げてきた成果だと思います。

地域にある食材を生かす

NPO法人　正応寺ごんだの会

理事長　石井　和郎
会員　90人

日本の原風景がここに

かつて地元の名産品であった「ごんだ柿」を1、000本植樹するなど、やっさごんだの見える風景復元から始まった「正応寺ごんだの会」。現在では、ウオーキング大会やイベントなどを通して地域の魅力を発信するほか、農業伝承の館を拠点に地域の資源を生かした農産物の加工販売や特産品の開発など、コミュニティビジネスを展開しています。サテライト会員（農業・工芸・木工などの専門家）も募集しています。

ばあばの知恵袋さくら

代表　末永　陽子
会員　4人

エッセンスはばあばの知恵

高城石山地区で、地域の食材や素材をばあばのもつ知恵を生かして提供しようと始まった「ばあばの知恵袋さくら」。廃油からのキャンドルづくりや春の野草摘み体験、旬の食材を使った料理教室、薫製づくりのほか、米の普及推進のための米粉のスイーツづくり体験なども行っています。里山で取れた新鮮な食材にばあばの知恵というエッセンスを加え、食体験活動や地域おこしに励んでいます。

地域で考え ひらく笛水の未来

会長　今後は、「茅葺の里」笛水で販売する加工品やここにしかない名産品を開発したり、インターネットを使った販売をしたりして地域を盛り上げていきたいですね。

館長　地域の課題の一つは、笛水地区内の自治公民館の合併問題。4つある自治公民館が合併することで、経費を削減できたり、公民館長の後継者の問題なども解決できたりしますので、それが地区全体で考えている課題で、地域に流して検討してもらっています。個人的には、面積は広いけれども、戸数的には比較的少ない方なので可能ではないかと思っています。

会長　将来的には、「茅葺の里」の収益で地域の行事を行ったりするのが理想です。人のまとまりが自慢の笛水地区。高齢化が進む中で公民館費をどうするか、みんなで考えて、いい結論が出せるといいですね。

館長　笛水のいいところ。みんなが声を掛け合い、助け合える地域。そして、別の地域の人が元気のあるこの地域を第2の古里として帰ってみたいと思えるような、そんな地域にしたいですね。

取材を終えて

合併して5年目、旧4町には地域協議会が設立され、旧都城市の各地区にはまちづくり協議会の設立が検討されるなど、それぞれの地域の独自性を生かしたまちづくりが進められようとしています。

今回紹介した笛水地区の取り組みは、地域に危機感を感じた平成14年から始まりました。

山間部にあり、高齢化率も高く限界集落となるおそれがある地域でありながら、イベントなどで接したメンバーからは、いきいきとした笛水の元気が伝わってきました。

また、何をどうしていくのか、地域独自の課題に正面から取り組みながら、一つ一つを一生懸命取り組んでいる姿が印象的でした。

どんな地域でも地元への情熱、思いを語り合い、ありふれた言い方かもしれないが、そこにあるものを生かしながら進める地域づくりこそ、今まちづくりに求められている姿なのかもしれません。

地域にある自然を生かす

関之尾むかえびと

会長　奥田　正明
会員　17人

おもてなしの心で 魅力発信！

「日本の滝百選」にも選ばれている関之尾滝の魅力をアピールしたいと、昨年発足した観光ガイドボランティア「関之尾むかえびと」。九州新幹線鹿児島ルートの全線開通を前に観光地として魅力を高めていく取り組みを進めています。関之尾滝のほかに、滝上流の浸食穴群「甌穴（おうけつ）」（国天然記念物）や周辺の見どころ、歴史、昔から伝わる伝説などを観光客におもてなしの心で説明しています。

青井岳の森ふれあい交流実行委員会

会長　前田　宏
会員　22人

歩きながら 感じる自然

樹齢500年以上ともいわれる大カヤの木の保存活動から始まった青井岳の森ふれあい交流活性化委員会。大カヤの木周辺の散策や、旧薩摩藩が参勤交代に利用していたといわれる薩摩古道の散策などの自然体験学習を中心に活動しています。子どもたちに山歩きなどを体験してもらい、季節ごとに変わる景色や草花などの観察を通して自然の素晴らしさを感じ、豊かな感覚を持って欲しいと取り組んでいます。